（道徳通信）

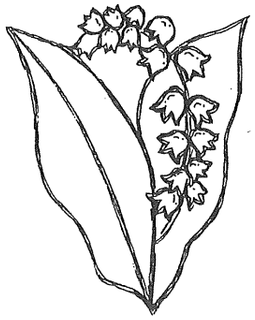
Heart to Heart

H 23, 2, 10
道徳教育部

寒さ厳しい折、保護者の皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。新学期を迎え、１月も慌ただしさの中であっと言う間に過ぎてしまいました。

道徳の時間の感想文を読んでいると、３学期に入り、どの学年も文の内容が大きく変化していることに気づきます。質量共に、今まで以上に読み応えのあるものになり、生徒の内面の成長がうかがわれます。道徳の時間だけでなく、１年生は福祉交流学習を終えて、２年生はスキー学習、３年生は進路の取組を通して、自分の生活を振り返る機会が増えたことにも関わっていると思います。様々な教育活動を通して、今年も生徒１人１人が着実に成長していけることを願っています。

今月も、各学年の道徳の授業に対する感想文を紹介したいと思います。



～生徒感想文～

～１年生～

１年生は、今月は担任以外の先生が各クラスを回って、道徳の授業をされています。各先生方の味のある授業となっています。まだ、３クラスとも回れていないので、教材名と簡単なあらすじを紹介します。

「真のプロフェショナル～三浦　知良～」・・・テーマ：強い意志

あらすじ

強い意志を持って、夢を追いかけることの素晴らしさを、三浦カズ選手の経験談によって気づける話です。

「ガンジスの風に吹かれながら泥まみれで過ごした３０日の記憶」・・・人間愛

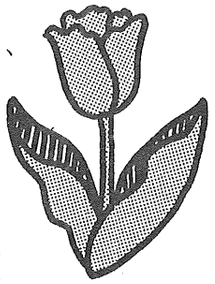
あらすじ

インドの生活について知り、感じたことを感じたままに書かれている。１人のインド人の男性の夢を叶えることになった筆者の行動から、助け合うことの素晴らしさ、夢を持って生きることの大切さを語った話です。

「方言のクッション」　・・・個性尊重

あらすじ

筆者自身の、自分が話す「大阪弁」を意識することになったある出来事は、その後の経験を通して、方言のもつ「あたたか味」や「親しみやすさ」について知り、自分の言葉について考える事ができる話です。



～２年生～

「アップルロード作戦」・・・テーマ：郷土を思う心

あらすじ

昭和２２年４月２０日、大火にみまわれた長野県飯田市。数年後、町に作られた防火道路にりんごの木を植樹したいと、市立東中学校生徒会代表の生徒達が市役所に願い出た。全校の先生と生徒、合わせて千五百人は力を合わせて植樹に取りかかり、りんご並木ができあがりました。当番を決めて、虫取り、水やり、観察等仕事が続きました。

一年後、植樹した４０本のうち１９本が枯れてしまいましたが、その後、新聞記事等の協力で、大学農学部教授の援助を受けることもでき、町の人の理解も得るようになりました。ある花火大会の晩に、りんごが盗まれる事件が起きました。生徒達は、集会を開き、「諦めず、りんごの手入れを続けていこう。」と決めたのでした。

あれから半世紀を超えた現在も、東中の生徒達は毎日、並木の世話をしています。昭和３０年、数個しか採れなかったりんごも、この頃は毎年数千個の収穫があり、収穫したりんごは、お世話になった方々をはじめ、福祉施設などにも贈られています。

～生徒感想文～

・今までずっと続いてきたのは、１人１人が信念を持ってやっていたからだと思う。でももっと大きかったのは近くや遠くからの励ましだったと思う。時間も費用もかかるのに今まだできるのは、周りの人の温かい心や支えだと思う。こうやって町全体でひとつになるのはすごくいいことだと思った。

・生徒全員がみんなの事を考えられていて、すごいと思った。自分のことだけでなく、みんなが安心して暮らせるように願ってつくったことは、一生心に残ると思う。

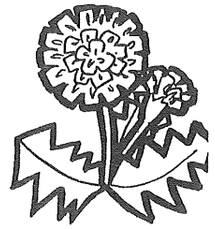
・私と同じくらいの中学生の人達が、りんごの木を植えるという大変そうな作業を、損得を考えずにできるというのはすごいことだと思います。立ち上がった１人の生徒というのがいましたが、その人の考え方は大人でもなかなか考えられない事なんじゃないかと思います。東中学校のような学校になれたらいいと思います。

・中学生が植えた並木を町の人みんなが大切にすることで、「この木を燃やしてはいけない。」「なくしてはいけない！」という意識が高くなって、二度と大火が起こらないようにすることができると思う。

・りんごの実が盗まれても、めげずにまた実がなるまで育てていく。そんな東中学校の生徒の強い姿に町の人々は感動したんだと思います。そして町の人々は、この１つのりんごにはたくさんの願いが詰まっていると知ったから盗む人はいなくなっていったんだと思います。私も、スーパーでふつうに買うあのりんごにも育てた人の苦労がたくさん詰まっているんだと気づかされました。東中学校の生徒はたくさんの町の人の心を動かしたと思います。

～３年生～

「神戸新聞の７日間」・・・テーマ：勤労の意義と社会貢献



あらすじ

１９９５年１月１７日、阪神淡路大震災が起こった。神戸新聞の記者たちは、自分も被災し、ケガをしたり家族の安否がわからないという中でも神戸新聞社に出社する。編集局長の「必ず出すんや！」という熱い思いとそれに応えた記者達の必死の努力、そして京都新聞の協力のおかげで新聞は発行された。たった４ページの「無念の夕刊」だったが、休刊をしたことがないという神戸新聞の誇りを守り、孤立で不安がっている被災者の人々に、少しの安らぎを与えた。　新聞発行までの記者達の闘いの内容を、事実をふまえリアルに、感動的に綴った内容のお話です。

阪神淡路大震災に関わる報道が今年もなされていることを受けて、「みんなに知って欲しい」「考えて欲しい」という思いで、この道徳の時間を持ちました。

～生徒感想文～

・電波がストップした中で、被災者にとって一番信頼できるのが、新聞だったのだと思います。その新聞が心の支えになればいいと思って、新聞社の人々は働いたのだと思います。その時には、噂やデマもあったそうです。その不安から抜け出してくれたのが、熱意を持った社員の人だったのだと思いました。

・この話は、前ドラマで見ました。自分より、みんなに情報を伝える方が優先というのはすごいなぁと思った。こういう新聞社があるから、情報は途切れずに私たちの所まで、届いているんだなぁと思った。

・神戸新聞社の人達が、家族が被災していても働いていたのは、新聞社の人達のプライドやと思う。人々に情報提供をするのが仕事やから、自分は新聞社の人やから、やらなあかんって思ったんやと思う。その結果、新聞が人々の安らぎになって、本当にすごいと思った。そして、京都新聞社とのやりとりで協力、助け合いって大切なことなんだと思った。

・自分がケガをしてでも出社して、新聞を書くのに必死になったのは、自分が被災者やからこそ、伝えたいことや他の人より伝えられることがたくさんあったんやと思う。でも、もし自分が被災者なら、仕事より、自分や家族を優先してると思う。一瞬の大きな揺れで、人の幸せを壊してしまうなんて、悲しすぎると思った。

・私は、「被災者の方々が元気になる、希望が持てる、夢が持てる、光が見えるそんな新聞を作ろうというムードになった。というところに感動しました。取材をしている内にあまりにも辛くなり、何のために新聞を書いているのか、本来の在り方が分からなかった時、そう思えたのはすごいなぁと思いました。たぶん、こういう時に、どんな状況なのか知りたいし、良い方向に向かってたら元気になれるので、一番新聞が必要だと思います。自分もつらいのに、たくさんの被災者の方々のために、新聞を作ろうとしたのはすごいと思いました。

・新聞を作る人として、何かの使命感があったんじゃないかな？と思った。